

テサロニケ人への手紙第二2章 「主の日における惑わし」

1A 心を騒がせる信者たち 1-2

2A 不法の者の現れ 3-12

1B 神の宮での着座 3-4

2B 引き止めている者 5-8

3B サタンの欺き 9-12

3A 福音による召し 13-17

1B 救いの選び 13-14

2B 永遠の慰め 15-17

本文

テサロニケ人へ手紙第二2章を開いてください。2章は、この世におけるサタンの働きについて数多く書かれています。それで、午前礼拝の説教も、サタンが引き起こす惑わしについてじっくり見ていました。それを聞くと、げんなりします。心が重くなります。けれども、2章全体はむしろ、パウロは、テサロニケの人たちに慰めを与えるために書いていることが分かります。後半でパウロは、あなたがたは、これらのものから救われるように召されたことを話しているのです。この手紙全体で、使徒パウロは、彼らに福音の中で励ましと慰めを受けることを願っているのが伝わっています。

しかし、この世においても、そして教会の中にも私たちの心を騒がせるような知らせが入ってきます。いかにして私たちがそこから守られ、注意はするけれども、恐れる必要はないことを知りたいと思います。

1A 心を騒がせる信者たち 1-2

¹さて兄弟たち。私たちの主イエス・キリストの来臨と、私たちが主のみもとに集められることに関して、あなたがたにお願いします。

パウロはここで、「主イエス・キリストの来臨」と「私たちが主のみもとに集められる」について分けています。1章にて、主イエスが、燃える炎の中に現れて、力ある御使いたちとともに天から現れることについて話しました(7節)。これは、主が地上に戻って来られることです、再臨です。そして、もう一つは、テサロニケ第一4章で詳しく話した、眠っている者たちがまずよみがえり、生き残っている私たちが、一緒に引き上げられ、天から降りて来られたイエスと空中でお会いするということです。教会の携挙です。このことについて、お願いしたいことがあると言っています。

²霊によってであれ、ことばによってであれ、私たちから出たかのような手紙によってであれ、主の

日がすでに来たかのように言われるのを聞いても、すぐに落ち着きを失ったり、心を騒がせたりしないでください。

「主の日がすでに来たかのように言われる」のを彼らは聞いていました。主の日は、テサロニケ第一 5 章に出てきましたが、突然の破滅であり、神の御怒りであり、地上の罪と不法に対する神の裁きの現れです。これがすでに来ているかのように話している者たちがいたので、彼らは落ち着きを失ったり、心を騒がせた利していました。彼らは、迫害と苦難の中にいました。その苦難が、すなわち神の御怒りの現れであるかのように話されているのです。教会の中にも、大患難を教会が経て、それで携挙が来るという考えがあります。その考えの大きな問題は、教会が神の御怒りをあたかも受けるかのように人々が受けとめてしまうことです。

以前にもお話ししましたが、テサロニケの人々の受けている苦難は、この世から、サタンから来ます。キリストに属している者を、世は憎むとイエス様は語られました。しかし、主の日にある大患難は、そうした世に対する神の御怒りの現れなのです。主ご自身が、迫害者を含めて災いを下すために定めておられる期間です。この二つをしっかりと区別していないと、「苦しみがあるというのは、神から怒られている証拠だ」という、救いの確信を揺るがしかねない誤った教えに陥る危険があります。事実、テサロニケの人たちはその過ちを聞いて、心を騒がせてしまったのです。

私たちキリスト者は、主の日から救われるために定められているのです。主は私たちが今の世から救い出すために、ご自身のいのちを捨てて、その流された血によって、神に贖われた者としてくださいました。教会が天に引き上げられることは、その救いを示しています。ロトがソドムから逃げてから、ソドムが滅んだように、ノアの家族が箱舟に入ってから、洪水が起こったように、私たちが地上から取り除かれてから、地上に神からの災いが襲うのです。

主の日がすでに来ているという話は、いろいろな形で教会に入って来ていました。「霊によって」とありますが、誰かが預言を語ったのかもしれませんが。ことばは、誰かが語っていることばです。そして、「私たちから出たかのような手紙」とありますが、偽の手紙、つまり怪文書も届いていたのです。あらゆる形で入り込んできています。私たちは、ネットを始めとして、あらゆるところから情報が入ってきます。その中で、私たちの心を煽るようなものが数多くあります。そして、大患難の時にしか起こらない出来事を、あたかも今起こっているかのように話す、陰謀論的なものが非常に多くなっています。どんな人からの情報でも気をつけてください。自分が尊敬している人の名が書かれていたら、心が揺らぐかもしれません。しかし、そうであってはいけないとパウロは言っています。

2A 不法の者の現れ 3-12

1B 神の宮での着座 3-4

³ どんな手段によっても、だれにもだまされてはいけません。まず背教が起こり、不法の者、すなわ

ち滅びの子が現れなければ、主の日は来ないのです。

パウロは、一か月前後のわずかな間に、聖書預言にある終わりの日について、かなり詳しく語ったようです。使徒たちの時代と、今のキリスト教会にはその空気に大きな違いがあります。キリストが来られ、この方が復活した今、すでに終わりの時であるとみなしていました。しかし、まだ来ていません。そのような、時は近いという緊張感と切迫感の中で生きていたのです。そして私は、今の時代においても、教会はそのような姿勢で生きて行くべきだと信じています。

そこでパウロは、聖書の預言で終わりの日に起こること、主の日に起こることをしっかりと、福音を信じた者たちに教えなければいけないと考えました。ユダヤ人の間で、ダニエルの預言は大切にされていました。それは、彼らがギリシア時代、アンティオコス・エピファネスという王が自分たちの神殿を、偶像を持ち込んだことによって汚され、神に対する冒瀆を行ったことをしっかりと覚えていいるからです。それが起こると預言したのがダニエルです。かつ、ギリシア時代にそれが起こるだけでなく、ローマの後に来る人物が、同じような、荒らす忌まわしいことを神の宮に対して行うと預言していました。

そのことを、はっきりとオリーブ山で教えられたのが、私たちの主イエスです。ダニエルの預言をしっかりと悟りなさいという命令も加え、次のように語りました。「マタ 24:15-21 **それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす忌まわしいもの』が聖なる所に立っているのを見たら——読者はよく理解せよ——ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。屋上にいる人は、家にある物を取り出そうとして下に降りてはいけません。畑にいる人は上着を取りに戻ってはいけません。それらの日、身重の女たちと乳飲み子を持つ女たちは哀れです。あなたがたの逃げるのが冬や安息日にならないように祈りなさい。そのときには、世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決してないような、大きな苦難があるからです。」**ここの「大きな苦難」と訳されているのが、大患難と呼ばれるものです。荒らす忌まわしいものが聖なる所に立つのが、大患難の始まりです。

そして、このことが起こる前に「背教」が起こる、とパウロは言います。ギリシア時代の。アンティオコス・エピファネスによる大迫害は、彼だけで可能になったものではありません。ユダヤ人の中で、ギリシアの宗教に迎合し、積極的に妥協した者たちが出てきたので、そういった者たちをアンティオコスが重用して、それで迫害が可能になったのです。何か、教えの一部を変えてしまうというような、偽りの教えではなく、信じていることの土台をひっくり返すようなことをやるのが「背教」と呼ばれています。エルサレムに神殿がありましたが、ギリシアの神々の宮で拜んで、神殿でも主なる神を拜む、ということではなく、それも立派な偶像礼拝ですが、神殿の中でギリシアの神々を拜むということです。この背教があつて、それで荒らす忌まわしいことが起こりました。ゼウス像が立てられ、祭壇では豚が屠られて、その血が神殿の中で振りかけられました。

ですから、同じようなことが起こるということを、パウロは話しています。それが詳細に、はっきり分かるのが黙示録 11 章です。「11:2 神殿の外の庭はそのままにしておきなさい。それを測ってはいけない。それは異邦人に与えられているからだ。彼らは聖なる都を四十二か月の間、踏みにじることになる。」神殿は建てられています、外庭が異邦人に与えられています。そして後半の 42 か月、つまり三年半は神殿全体が踏みにじられる、とあります。前半の三年半、神殿の敷地の外庭の部分が、異邦人に渡されているというのは、信仰的にかなり妥協しているのではないかと思います。今、神殿再建を願っている、ユダヤ教の右派の人たちがいますが、彼らはあくまでも岩のドームがなくなって、そこに神殿が新たに再建されることを願っていますが、そうではなく、少しずらして建ててののです。そして、11 章 8 節には、「その都は、霊的な理解ではソドムやエジプトと呼ばれ、そこで彼らの主も十字架にかけられたのである。」イザヤ書 1 章で、ユダとエルサレムをソドム、ゴモラと主は呼ばれています。異教の汚れた町と変わらず、背教していると咎めているのです。

主イエスは、ご自身がよみがえられてから 60 年ぐらい経った後に、アジアの七つの教会にお語りになりました。黙示録 2-3 章にあります。そこでも、背教について警告しておられます。教会の指導者たちを、女預言者イゼベルが偶像のいけにえを食べさせ、淫行を行わせていて、それで、この女の行いを悔い改めないなら、「大きな患難の中に投げ込む。」とあります(2:22)。背教があったから、それで不法の者が来ます。ですから、ペテロも第一の手紙でこう言っています。「4:17 さばきが神の家から始まる時が来ているからです。それが、まず私たちから始まるとすれば、神の福音に従わない者たちの結末はどうなるのでしょうか。」ですので、教会の中にも単なる妥協を越えて、信仰の土台をひっくり返すような背教が起こるのだということを、知っておく必要があります。

⁴ 不法の者は、すべて神と呼ばれるもの、礼拝されるものに対抗して自分を高く上げ、ついには自分こそ神であると宣言して、神の宮に座ることになります。

不法の者の特徴は、ここにあるとおり、すべて神と呼ばれている者、礼拝されるものに対抗します。ダニエルの預言から来たものです、「11:36-37 この王は思いのままにふるまい、すべての神よりも自分を高く上げて大いなるものとし、神々の神に向かって驚くべきことを語る。彼は栄えるが、ついには神の憤りで滅ぼし尽くされる。定められていることがなされるからである。彼は先祖の神々を心にかけて、女たちの慕うものも、どんな神々も心にかけていない。すべてにまさって自分を大いなるものとするからだ。」

これは、イスラエルの神、天地創造の神に対してだけでなく、いわゆる神々と呼ばれる偶像に対しても同じです。それぞれの国がそれぞれの神々を持っていますね。それらは、もちろん偽りの神なのですが、それでも、自分自身を超えた存在があるということで、一定のへりくだりがあるのです。しかし、そういったものをすべて否定して、自分こそが神なのだとすることです。「私は、神仏さえも信じない。自分自身を信じる。」というような考えを持った人が結構多いですね。けれども、ある意

味で信心深い人々より、神の前では罪深いのかも知れません。高ぶっているからです。

そして、これこそが、サタンが犯した罪でした。「イザ 14:13-14 おまえは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山で座に着こう。密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。』」イエスご自身が悪魔から受けた誘惑がこれでした。「マタ 4:8-9 悪魔はまた、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての王国とその栄華を見せて、こう言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これをすべてあなたにあげよう。」」イエス様は、これを拒否して、それで十字架の道に向かわれました。そのことによって、世の救い主、キリストになったのです。しかし、この不法の者は、そのサタンの誘いを受け入れます。「黙示 13:2 竜はこの獣に、自分の力と自分の王座と大きな権威を与えた。」

サタンが不法の者を通して行わせるのは、神の宮に入って、神であると宣言することです。主なる神は、ご自身が人々と共に住むということを大きな願いとしておられます。エデンの園から始まり、罪を犯してからは、イスラエルの民を選ばれて、彼らの間にご自身が住むことを選ばれました。それで幕屋を造るようにさせ、そしてソロモンの時には神殿の中に住まわれたのです。神の御名を最も汚すかたちで、冒瀆する形で、自分が神であると宣言する不法の者は、ユダヤ人の神殿の至聖所の中に入って、神であると宣言します。そしてそれを、イエスがオリーブ山で語られました。このようにして、神の人間に対するご目的を根底から覆そうとする動きを、不法の者はします。

2B 引き止めている者 5-8

⁵ 私がまだあなたがたのところにおいたとき、これらのことをよく話していたのを覚えていませんか。⁶ 不法の者がその定められた時に現れるようにと、今はその者を引き止めているものがあることを、あなたがたは知っています。

不法に対して、神は、ご自分の憐れみによって、それを抑制する働きをずっと行われてきました。午前礼拝でお話ししましたが、ノアの時代の洪水について、主は、ご自分の霊をもって人々が悪に傾くのにに対して争われていました。ロマ 13 章には、「13:1 人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられているからです。」とあります。神は国などの権威を立てておられて、剣を有するのを許しておられます。そこで、悪を行えばそれを制する権威を与え、彼らを神のしもべとしておられます。しかし、反キリストは、そうしたおきてや法則までも無きものにしようと動きます。

その抑制する働きの最前線として立たされているのは、教会です。キリストの弟子たちの集まりです。主は、山上の説教で御国についての八つの幸いを宣言された後に、「あなたがたは地の塩です」「あなたがたは世の光です。」と宣言されました(マタイ 5:13,14)。塩は、防腐剤の役目を果たします。腐敗する過程を遅らせることができます。光は、闇を明るみに出す働きをします。私たち

がキリストの者となった時に、そしてその者たちが集まる時に、神はそこを聖霊の宿られる場としてくださり、地の塩、世の光としてくださるのです。悪が完全に現れるのを引き止めているのです。

私たちの内にある葛藤、肉と霊の葛藤は、まさに教会に働く御霊の、世に対する引き止める働きでもあります。主は、教会によって不法の者が現れるのを引き止めておられるのです。

⁷不法の秘密はすでに働いています。ただし、秘密であるのは、今引き止めている者が取り除かれる時までのことです。

不法の秘密というのは、すでに働いているとのことですが、天地創造の時から働いています。サタンが天から落ちてから、何とかして神とその支配を覆そうと企んでいます。それで、人間の歴史の中で、終わりの日に不法の者が行うことを指し示すようなことが、何度となく起こってきました。不法の者を、獣、荒らす忌まわしい者と呼んだダニエルですが、その時代に、ネブカドネツアルが金の像を造って、それをすべての者に拝むように命じました。世界帝国の王が、自分を象った像を拝ませようとした。それに抗ったのが、神のものとしていた、ダニエルの友人三人です。

そして、ギリシアの時代に、アンティオコス・エピファネスが行ったことが、まさに獣の行うことの前触れとなりました。神の神殿にギリシアの偶像を立て、豚を祭壇で焼いて、その屠った血を神殿の敷地にばらまくようなことをしました。そして、律法を守ろうとする者を徹底的に迫害しました。それから、ローマ時代には、代々の皇帝に自らを神格化させ、その像を拝ませる動きが度々ありました。それに抗ったのが、当時のキリスト者で彼らは首を斬られて、殉教したのです。

こうして不法の秘密はすでに働いています。ヨハネ第一には、興味深い言葉があります。「Ⅰヨハ 2:18 幼子たち、今は終わりの時です。反キリストが来るとあなたがたが聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現れています。それによって、今は終わりの時であると分かります。」初めの「反キリスト」の前には定冠詞、英語の the が付いています。これは、一人の人物なんですね。けれども、次の「多くの反キリスト」は定冠詞がありません。4章3節には、「イエスを告白しない霊はみな、神からのものではありません。それは反キリストの霊です。」と言っています。反キリストの霊に動かされている者たちが多くいるということです。

第一の手紙では、具体的には、イエス・キリストが肉体を取って現れたことを否定する、グノーシス主義系の異端の者たちのことです。キリストが肉体を取られて、人となられて私たちの間に住まわれたということ。そして、私たちが集まるところに、御子と御父との交わりがあるのだということ。ものすごく当たり前のこと、真理そのものですが、それを否定して、特別な知識を持っている者たちが優れているとして、教会から離れて行った人々が反キリストです。

実に身近な問題です。私たちはコロナ禍で、見事に教会だけでなく、モスクからもシナゴークからも人々が集まりませんでした。そしてコロナ制限が解除された今も、教会に人々が返ってきません。それでもいいのだとするところで、自分の信じているのは何なのかを吟味する必要があります。「Ⅱコリ 13:5 あなたがたは、信仰に生きているかどうか、自分自身を試し、吟味しなさい。それとも、あなたがたは自分自身のことを、自分のうちにイエス・キリストがおられることを、自覚していないのですか。あなたがたが不適格な者なら別ですが。」

⁸ その時になると、不法の者が現れますが、主イエスは彼を御口の息をもって殺し、来臨の輝きをもって滅ぼされます。

ダニエル書においても、黙示録においても、この不法の者を預言していますが、そこで神がお語りになりたいことは、要は、「主イエスが不法の者を滅ぼす」ということです。不法の者は、まさに究極の悪の権化で、サタンの受肉であります。主ははるかに偉大な力を持っておられ、一瞬にして、彼を滅ぼされるということを知るべきでしょう。ゼカリヤ書には、主が到来したら、敵が生きて、立っているうちに腐ってしまうことを預言しています。「14:12 彼らの肉は、まだ足で立っているうちに腐る。彼らの目はまぶたの中で腐り、彼らの舌は口の中で腐る。」そして、黙示録 19 章によると、主イエスの口から剣が出ていて、エルサレムに集まって来た諸国の軍隊は倒れて、その兵士たちのからだは猛禽のための大宴会になります。そして、獣は生きたまま火の池に投げ込まれます。

3B サタンの欺き 9-12

⁹ 不法の者は、サタンの働きによって到来し、あらゆる力、偽りのしるしと不思議、¹⁰ また、あらゆる悪の欺きをもって、滅びる者たちに臨みます。彼らが滅びるのは、自分を救う真理を愛をもって受け入れなかったからです。

預言者モーセは、数多くの奇跡を行いました。そうした力強い働きをもって、彼が神に立てられた預言者だとイスラエルの民は認めました。そして、自分のような預言者が後に来るとして、キリストが来られることを預言しました。そしてイエス様が現れて、しるしと不思議を見せました。しかし同時に、偽預言者も来るから気をつけなさいと警告しています。他の神々に誘導するような者は、偽物であり、殺さなければいけないと言っています(申命 13:1-5)。イエス様もオリーブ山で、「偽キリストたち、偽預言者たちが現れて、できれば選ばれた者たちをさえ惑わそうと、大きなしるしや不思議を行います。」と言われていきます(マタ 24:24)。

これらのしるしや不思議が欺きとなって、キリストの福音を受け入れる人々が騙されて行きます。そうして不法の者が主イエスによって滅びる時に、自分たちも偽りの中で滅んでいく道を歩むのです。黙示録によれば、彼らは陰府に下り、千年間のキリストの統治の後、悪魔が解き放たれ、悪魔が火の池に投げ込まれた後に、彼らが陰府から復活します。そして、神の大きな白い御座の前

に立って、神の持っておられる書物に従って、自分たちの行いに対しての裁きを受け、彼らも人硫黄の池に投げ込まれるのです。

¹¹ それで神は、惑わす力を送られ、彼らは偽りを信じるようになります。¹² それは、真理を信じないで、不義を喜んでいたすべての者が、さばかれるようになるためです。

午前礼拝でじっくりと学びましたが、主が真理を信じない者たちをさばき、彼らが滅びるのは、主がそれを喜んで行っていないということです。みなが救われることを願っておられます。しかし、喜んでるのは、彼ら自身なのです。不義を喜んでいるために、裁かれています。自分で自分の首をしめる、自分で滅んでいるということです。神のみこころは、変わりません。「ヨハ 3:16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」

3A 福音による召し 13-17

そして実は、次が 2 章全体の本望だと思います。パウロは、要は次のことをテサロニケ人たちに話したいと願っています。

1B 救いの選び 13-14

¹³ しかし、主に愛されている兄弟たち。私たちはあなたがたのことについて、いつも神に感謝しなければなりません。神が、御霊による聖別と、真理に対する信仰によって、あなたがたを初穂として救いに選ばれたからです。

「しかし」から始めています。彼らは、主の日がすでに来たということばで、心を乱していました。しかし、安心しなさいと言っているのです、「主に愛されている兄弟たち」と呼んでいます。あなたがたは、どんな苦しみあつていようと主に愛されているのだよ、ということです。パウロは、ロマ 8 章で、キリストにある神の愛から私たちを引き離すものは何もないと断言しました。それが苦しみであっても、剣であってもそうなのだ、と言っていました。

そして、次に神に感謝することを述べていますが、それが「初穂として救いに選ばれたからです」ということです。救いの選びに彼らがあずかっているということです。選びというのは、神の一方的な憐れみと愛に基づいています。孤児院にて、ある夫婦が養子として引き取る時に、その選びは憐れみのそれであります。スポーツ選手の選抜とは全く異なる動機で選んでいます。イスラエルが選ばれたのも、神は憐れんで恋い慕ったからであり、彼らが正しいとか、優れているからではありません。主が憐れんでおられるからです。

そして、選びが主ご自身であれば、私たちの救いは確かなのです。「ヨハ 15:16 あなたがたがわ

たしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命しました。それは、あなたがたが行って実を結び、その実が残るようになるため、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものをすべて、父が与えてくださるようになるためです。」これはちょうど、幼い子がお父さんの手をつないでいるようなものです。自分が一生懸命お父さんの手をつないでいると思っていますが、実はお父さんが大きな手で子供の手をつないでいるから、支えられています。私たちもしっかりと主に立ちますが、しかし、初めに主が救いに選ばれているので、立つことができるのです。この神の選びがあるからこそ、不法の秘密が働いていても、主は私たちを守ることができるのです。

そして、救いに選ばれたのは、「御霊による聖別」によるとあります。不法の者が働き、サタンの偽りによって多くの者が惑わされる中で、あなたがたは御霊によって聖め別たれましたよ、と励ましています。罪から離れることができました。信仰を持った後で、聖別は日々の歩みで実現していきます。しかし、すでに信じた時に、聖められた者として神の前に立つことができるように選び別けてくださったのです。

それから、「真理に対する信仰」と、偽りに対する真理をパウロは強調しています。イエス・キリストご自身が真理であり、この方が十字架と復活によって成し遂げられた贖いについての真理です。それを受け入れなかったのが、サタンのあらゆる偽りに聞き従っていつてしまうのです。しかし、それから救われています、真理を信じているので。

それから、救いについては「初穂として」とあります。イエス様は、サマリアの女がご自身をキリストかもしれないとして町の中に行き行って伝えましたが、それを収穫として表現されました。初穂は、後に来る収穫を代表するような存在です。神の救いのご計画の中では、最終的な収穫とは世界中の人が救われるということではなく、それ自体はすばらしいことですが、主ご自身が戻って来られて、世界を建て直すことです。その初穂として、人々を救われます。「ロマ 8:22-23 私たちは知っています。被造物のすべては、今に至るまで、ともにうめき、ともに産みの苦しみをしています。それだけでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだに贖われることを待ち望みながら、心の中でうめいています。」

¹⁴ そのために神は、私たちの福音によってあなたがたを召し、私たちの主イエス・キリストの栄光にあずからせてくださいました。

私たちを神が福音によって召されたのは、目的があります。「私たちの主イエス・キリストの栄光にあずからせてくださいました」とあります。この方の義を私たちが身にまといます。神の恵みによって、身にまっています。そしてキリストが神の栄光で輝いておられるように、私たちが、キリストの栄光を身にまとう時がきます。復活し、また栄光のからだに変える時です。そして、キリストが再び地上に戻って来られる時、私たちもまた栄光の中で共に戻ってきます。神の子どもとしての栄光

を携えて、戻ってきます。

2B 永遠の慰め 15-17

だから、要は、「あなたがたには、主の日は襲いません。あなたがたは、そのために召されて、救いにあずかっているのです。」ということなのです。

¹⁵ ですから兄弟たち。堅く立って、語ったことばであれ手紙であれ、私たちから学んだ教えをしっかりと守りなさい。

いろんな教えが飛び交っています。けれども、堅く立っていなさいと勧めています。語ったことばや手紙とかで、主の日はすでに来ているとかいう話が来ても、それを鵜呑みにせずに、パウロたちから学んだ教えをしっかりと守っていなさいとのことです。私たちに求められているのは、すでに抱えている確信を最後まで保つことです。何か新たな啓示が与えられることではなく、今まで聴いてきた福音の中に留まることです。そうではない教えが、いろいろ出てきますが、振り回されてはいけません。救いは確かなのです。それは、神の憐れみと愛に基づくものです。

¹⁶ どうか、私たちの主イエス・キリストと、私たちの父なる神、すなわち、私たちを愛し、永遠の慰めとすばらしい望みを恵みによって与えてくださった方ご自身が、¹⁷ あなたがたの心を慰め、強めて、あらゆる良いわざとことばに進ませてくださいように。

この祈りに、パウロたちの願いがすべて詰まっていますね。主イエスと父なる神が、私たちを愛しておられること。そして永遠の慰めを与えておられることです。神の御怒りから救われているのです。永遠の救いをもって救われています。救われたのに、途中で見捨てる方ではありません。そして、すばらしい望みです。イエス様が来られて、私たちをその栄光にあずからせてくださいます。こんなすばらしい希望はありません！それから、それが恵みであることです。自分たちの功德では全くありません。私たちは滅びなければいけないのに、罪を赦してくださっただけでなく、豊かな祝福と栄光にあずからせてくださっています。

この真理によって、私たちの心が慰められ、強められるようにと祈っています。慰められ、強められるのです。この連続ですね。そして、その慰めによって強められたことによって、あらゆる良いわざと言葉に進むことができます。これが、私たちが良いことと、福音を語る原動力となります。その原動力になっている希望を取り壊そうとする悪い教えから離れましょう。そして、使徒たちの教えに堅く立ちましょう。